
夕焼けに響く慟哭

聖闘士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕焼けに響く慟哭

【Nコード】

N8097J

【作者名】

聖闘士

【あらすじ】

戦が終わった跡地に、一人の女性がたたずむ。全てが終わってしまった場所で、彼女は何を思うのか。

「みんないなくなっちゃったわね・・・」

茫然とした口調でそう呟いたのは、二十代になったばかりに見える一人の女性だった。女性の着ている鎧は、今回の戦において、本陣で兵士を鼓舞する彼女のために造り上げられた特別なものであり、その戦女神を意識した意匠は、大陸一美しいと褒めそやされたものであった。

その鎧も今は戦死者たちの血にまみれており、銀色の輝きを失ったそれは、すでに周りで息絶えている雑兵のものと区別がつかなくなっている。

しかし鎧がそんな状態になっただけでもなお、彼女の美しさは損なわれることはなく、辺りが死体だらけであるにも関わらず、彼女はまるで本物の女神のように見えた。

——肩口までで切りそろえられた金髪

——悲しみに沈むなかにも、意志の強さが見え隠れする碧眼

——血と埃にまみれていてもなお、ひとときわ光り輝く白磁の肌

——全てが完璧なバランスで配置された顔のパーツ

本人は意識していなくても、彼女の茫然としている様子は見る者の胸を苦しくさせるには十分であつた。

「——敵兵がまだ生き残っているかも知れないんだ。あまり不用意にその辺をうろつくんじゃない」

そんな彼女に不愉快そうに声をかけてきたのは、一人の青年だつた。

この大陸では珍しい黒目黒髪を持った、二十代中頃に見えるこちらは、不機嫌そうな目つき以外は、どこにでもあるような顔であつた。美形と呼ばれるにはほど遠いが、醜男ぶおとこというわけでもない。

しかし、美の化身のような彼女と比べると役不足な感否めず、彼らの関係を知らない人物にとっては、彼女に対して無礼な口を利いているのがこの見栄えのしない男であると知れば、意外さを禁じえないであらう。

もつとも彼女の方は、男が自分に対してそのような口調で話しかけてくることには慣れていたので今更そんなことでは驚かず、男の方へ向き直ると茫然とした口調のまま問いかけた。

「・・・あなたはいつもと変わらないのね。こんな状況だというのに」

それに対して男の方はこれ見よがしに肩をすくめて見せると、彼女の方へ呆れた声で返事をした。

「おいおい、お前の方こそ何を言っているんだ？お前だって、戦に参加するのは初めてじゃないし、今回みたいに大量ではないかも知れないが、敵味方の死体に囲まれた経験だって少なからずあるだろう？」

そのセリフを聞いた彼女は、それまでの茫然とした様子から一変して、男の方へと食ってかかった。

「『何を言っているんだ』ですって？それはこっちのセリフよつつ！！！大勢の人間が死んだのよ？私が命じて、あなたが指揮した戦で大勢の味方が死んだのよ？大勢の敵兵を殺したのよ？みんな死んでしまったのよ？何でそんなにいつも通りでいられるのよ・・・」

彼女は両手で抱えていた、いくつかの品物を男の目の前に突きつけると一つ一つについて説明を加えていった。

「——この手袋は私に怪我人の手当の仕方を教えてくれた医療班のおばさんのものよ。おばさんは、敵兵に脚を斬られた兵士を助けに飛び出して、射殺されたそうだわ。」

「——このはちまきは、今回の戦が初陣だと言っていた内務大臣の孫息子のものよ。彼は撤退の途中で逃げ遅れて、味方に踏みつぶされたそうよ。」

「——そしてこの槍の欠片はあなたも良く知っている、私の護衛任務にあたっていた女性兵士のものよ。彼女は私の目の前で、流れ矢にあたって亡くなったわ。」

「——このルビーをつけていたのは、あなたの可愛がっていた第一

騎兵大隊長でしょう？彼は敵の大隊長と一騎打ちになって、相手を見事打ち取ったけれども、その時の傷がもとで城で亡くなったと聞いているわ。

これらの品を見ても、いつものことだとあなたは割り切れるのっ？」

「・・・そんなものは捨ててしまえ、もはや単なるゴミだ。死んだ人間についても、既にどうしようもないんだから、早く忘れた方が
良い」

男は彼女の言葉に冷たい声と表情で返事を返した。しかし彼女の方はその返事に当然納得など出来ずに、大声で男の方へ食ってかかった。

「忘れるっていうのっ！？私たちと一緒に過ごした人達をつ！私たちのために戦った人達をつ！私たちのために死んでいった人達をつっ！それが正しい対応だっていうのっ？」

彼女はこの質問に対しても、男がいつもと同じように淡白な反応を返してくるだろうと思っていたし、そうしてくれることを期待していた。激情に駆られる彼女を氷のような正論で諫めるのは、いつもこの男の役割だったから・・・

しかし、彼女の期待は裏切られた。彼女の叫びに対して返ってきた声は、彼女の覚えている、その男のどんな声よりも弱々しかった。

「——確かに、正しくはないのかも知れない。」

でも、俺は弱い人間だから・・・忘れることと慣れることでしか、前へ進めないんだよ・・・」

それを聞いた彼女は、何も言えなくなつた。その男の発した言葉よりも、その男の表情が彼女の言葉を押しとどめた。

——あたりに死の匂いが充満している両者の間を、風と共に沈黙が通り抜けていった。

その沈黙を破つたのは、二人の名を呼ぶ一人の騎士の大声と、その騎士が乗る馬の蹄の鳴る音^{ひづめ}だった。その騎士の後ろからは、二頭の馬がついてきており、彼女たちを迎えに来たことが分かる。

騎士は二人の前まで来ると、馬から下りて地面に片膝をついた。そして

「申し上げます！軍務大臣より、リリアーヌ王女殿下並びにカタギリ司令官閣下宛てのお手紙をお預かりして参りました」

「軍務大臣からだ？・・・良し、少し下がっている」

「了解しました！」

騎士が二人から離れた位置へと下がつたのを確認してから、男は受け取った手紙をじっくりと読み込み、自らの懐へとしまい込んだ。

「何て書いてあったの？」

「簡単に言つと『敵味方の被害状況が一通り確認出来たから、戦勝パーティーを行いたい』という所だな」

「戦勝パーティー・・・」

「嫌なら、出なくても良いんだぞ？」

「出るわ。私が出なければ、それこそ命懸けで戦った兵士達に顔向けが出来ないもの」

「・・・そうか」

そう一言だけ言い残すと、男は彼女に背を向け先程の騎士の下へと歩き出した。

彼女はその男の背中に向かって、聞こえるか聞こえないかの声量で語りかけた。

「——私も強くはないけれど、あの人たちのことは忘れないわ。忘れないことだけが、私があの人たちにする事の出来る唯一の責任の取り方だと思うから・・・」

男からの返事は返って来なかったが、彼女は今の言葉が男へと届いていることを確信していた。次に彼女は、背後に広がる死体の山々へと視線を向けると、祈るかのように数秒間だけ目を閉じた。

永遠にも思えるような数瞬が過ぎ去った後、彼女は目を見開き、男の同じように騎士の待つ所へ歩き出した。そして、二度と背後を振り返ることはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8097j/>

夕焼けに響く慟哭

2010年10月9日22時59分発行